

失敗の取り扱い

言い訳と責任転嫁を教えるの？

2018.06.27

No.20

校長 渡邊 幸二

飛島に行ってきました。5年生はとて素晴らしい体験ができたと思います。企画・運営を行ってくださった先生方に感謝いたします。また、島の方々の温かさによってこの事業が成り立っていることもわかりました。

リフレーミング：「事件」を「教育」に変換する

学校では毎日いろんな事件というか子どもたちの問題が発生します。たくさん子どもたちが暮らしている社会ですので当然と言えば当然です。

この日々起こる事件を、そのたびに“大変だ！”と言って対応していても、おそらく良いことはありません。子どもたちが日々起こす間違い、失敗、いけないことを、単なる事件として処理するのでは教育者ではありません。つまり原因を究明し責める、糾弾することや、犯人探しをしてその罪を認めさせるだけなら、学校という場所が行うことではありません。子どもですので、やっちゃいけないことをしでかしてみたり、意地悪をしてみたり……そういう間違いや失敗だらけのはずです。だからこそそこに「学び」「教育」が発生するわけです。そういう子どもたちのミス、残念なこと、心のねじれの表出であるそういう出来事(事件)をリフレーミングし、何とか「教育」という土俵に持って行く必要があります。

失敗や事件はあっていいのです、というか成長過程で当然あるべきことです。先日の授業研究会でも話題になったように、子ども自身が困ったり悩んだりするから、そこに成長が生まれるわけです。われわれ教師、あるいは養育者である親の役目は、**子どもの成長過程のつまずきに寄り添い、それを本人の学びにつなげてあげること**です。つまずかないように道を平易なものにし過ぎたり、つまずいた時に子どもの代わりにそれを処理してあげたりすることでは決してありません。

ボールを無くした！

飛島に行った時、こんなことがありました。

自由時間に、飛島中学校の体育館の備品をお借りして、子どもたちはいろいろな遊びをしていました。バドミントンをする者あり、サッカーをするグループありで、それは賑やかで楽しそうでした。

自由時間の後半、外で野球というかキャッチボールをしていた子どもたちが、なにやら草むらでござろ探し物をしていました。そのうち「校長先生、ボールが



無くなりました!」とヘルプを求めてきました。たいして探しもしていないようなので、まず自分たちで探すよう言いました(飛鳥では、我々指導者はできるだけ不親切であろうと決めていました)。

子どもの失敗は子どもがまず責任を取るべきです。ですから、ボールが見つからなければ本人たちが探さなければならないし、もし紛失したらしたでその責任を取ることを学ぶチャンスだと考えます。自分の尻は自分でぬぐう態度を身につけさせなければなりません。最初から教師や親がしゃしゃり出ないことが肝要だと思います。



さて、子どもたちだけで20分くらい探していたでしょうか……それでも見つからないようなので、公益大ボランティアのAさんも加えて探しました。しかし、それでも見つかりません。なんとそのうち、体育館で遊んでいた多くの5年生が「どうしたの?」と次々外に出てきて一緒にボールを探し始めました。でもやっぱり見つかりませんでした。次の活動の時間も迫り、探すのをあきらめざるを得ませんでした。

ボールを無くした子どもたちは、職員室に行き、そこにいらした飛鳥中の校長先生に深々と頭を下げながら謝罪しました。一応これで最低限の責任を取ったことにはなります。しかし、それだけで終わりませんでした。体育館に戻り、担任のK.H先生にその顛末を報告に行くと、先生はそれを他の子どもたちにも話させたのです。一緒に探してくれた友への大事な報告です。

ボールを無くした子どもたちは、今回の失敗で大事なことを学んだでしょう。ひとつは**責任の取り方**です。無くした責任を取るために必死で探すという**最善の策**を講じなければならないこと。自分たちのミスで他者に迷惑をかけたなら、逃げずに、あるいは責任を誰かに押し付けずに、自分が**心を込めて謝罪**しなければならないことです。それからもうひとつ。**仲間の温かさ、ありがたさ**も学んだことでしょう。

言い訳と責任転嫁を教えるの?

子どもの失敗の対応を間違えると、おそらく「**言い訳を言う**」「**責任転嫁をする**」子どもになるように思います。

たとえば、どこかのレストランでバイキング形式の食事をしたとします。当然子どもも自分で料理を取りました。ところが、お盆をちょっと傾けてしまい、料理をこぼし、他人の服を汚してしまったとします。このとき、普通は謝罪し、クリーニング代を出すなどの対応をするでしょう。もちろん子どもに責任を取らせるという意味で、子どもにも謝らせることは当たり前でしょう。

しかし、ここで親がしゃしゃり出て、子どもに謝罪させることなくすべて親がやってしまったり、最悪、ちょっとしたことで滑るような食器を使わせているほうに責任があるなどとクレームをつけたりしたらどうでしょう。子どもは**失敗しても責任を取らなくていいこと、言い訳をしてもいいこと、自分の失敗は誰かに負わせることを学んでしまう**ように思います。

何度も言いますが、一丁前になるために学校で学んでいるのですから、その前の段階である子ども時代は失敗するのが当たり前! 失敗を糧に強くなる術を教えていかなければなりません。それは私たち大人も同じことです。一丁前といっても失敗はつきもの。誰かの失敗は責めるのではなく、5年生の子どもたちのように**“Don't mind!”**と共に**支え合うチーム**でありたい、失敗を恐れずチャレンジする教師でありたいものです。言い訳したり責任転嫁したりする教師には絶対にならなくてほしくありません。